

カミュ『異邦人』における「無関心」

鈴木 忠 士

第V章 自然的世界

3 躁 と 鬱

前提的考察

A. メランコリー親和型性格

B. 躁鬱病の病前性格と病状

(1) テレンバッハ——「秩序志向性」……（この項まで前号）

4 父親イメージと母親イメージ

A. 父親イメージ……（この項の途中まで本号）

B. 母親イメージ

V-4 父親イメージと母親イメージ

カミュ（1913—1960年）が『異邦人』（1942年刊）の独得の文体を編み出すと同時に、この作品の内容のすべてがそこに凝縮されているとも言える、「今日、ママが死んだ。それとも昨日か、僕は知らない」（9）という冒頭の一句の着想を得たのは、『手帳』に拠る限りでは1938年である¹⁾。又、脱稿は、同じく『手帳』によれば、1940年5月である²⁾。

一方、S.フロイトの著作は、1920年代には既に、その主要なものの仏訳が刊行されている。そして、カミュはおそらく1935年か1936年頃、「労働学校」で勤労者を相手にフロイト思想の手解きを試みている³⁾。更に、創作ノートでも読書ノートでも覚書帳でもある『手帳』には、奇妙なことに、フロイトの名もその思想・作品への言及も全く見当たらないのではあるが、しか

し1935年5月にカミュが筆を起したこの『手帳』の冒頭で読者はいきなり、「貧しい生活もある歳月を経ると、それだけでひとつの感受性を作り上げるに十分だ。そうした特殊な場合には、息子が母親に抱く奇妙な感情が〈彼の感受性すべて〉の基になる。〔だから〕このような感受性の実に多種多様な局面における現われは、幼・少・年・期・の・潜・在・的・で、身・体・的・な・思・い・出——魂に取りついた鳥もちのようなもの——によって十分に説明がつくのだ」⁴⁾(傍点は鈴木、以下同じ)という一節にぶつかる。ここには、自家葉籠中のものとされたフロイト思想の影響が歴然としている⁵⁾。

そうしてみると、1935年から1936年にかけて書かれた断章が纏められてその翌年の5月に『裏と表』⁶⁾と題されて出版されたカミュの処女作品集にしてからが、たとえそのうちの『肯定と否定の間』と『魂の中の死』の二つの断章に限って言われるにせよ、「真に自伝的なテキスト」⁷⁾と極め付けて、「〔『裏と表』の〕自伝的な辛い思い出が、精神分析的方法によって発見可能な〔『裏と表』以降の〕諸テキストの潜在的且つ否定的な象徴体系と実に良く合致する」⁸⁾などと簡単に言えるものかどうか疑わしくなる。まして『異邦人』執筆に当っては、精神分析的な象徴解釈やエディプス・コンプレクスの図式が作者の念頭に置かれていた可能性は十分あるとしなければならない。実際、主人公ムルソオの「死んだ母は物語の中で終始存在し続ける」⁹⁾し、主人公は又、アラブ人殺害の廉で告発されながら「不可思議な理屈によって父親殺しの罪を負わされている」のであり、「去勢」を象徴する「断首刑」¹⁰⁾を受けることになるのである。

従って、作者自身が自分の作品の「思想」にではなく「暗い部分、私の中の盲目的で本能的なもの」¹¹⁾に照明を当てるように批評家に促しているとはいっても、精神分析学の観点から『異邦人』を分析しようとする者は、作者の術中に嵌まらぬためには、作者の精神分析学の理解の上を越さねばならないわけであるから、テキストの「意図的 (volontariste) な「象徴体系 (symbolisme)」の蔽いの中から「潜在的な象徴体系」¹²⁾を発掘することは容易なこ

とではない。たとえ分析によって顕われた「潜在的な」構造が精神分析学の「古典的な図式」¹³⁾にきれいに収まるからといっても、それがなお作者自身の用意した「意図的」な構図でないかどうか吟味されなければならないからである。

『異邦人』についてこれまでになされた精神分析学的解釈の試みのうちで、最も簡にして要を得たものはB.パンゴーのそれであろう。パンゴーによれば、「ムルソオ＝エディプスは、何人も免れようもあるまい、そして又すべての物語の中核を成しているこの〔エディプスの〕葛藤のうちに捕えられている。しかし、彼がそこに与える解釈は一風変っている。アラブ人を殺すことによって彼は〈法〉、つまり演劇的役割社会〔la société théâtrale〕では当局者によって代表される〔演じられる〕父親、の報復を買う。彼は死刑を宣告される。何故なら、母を我が物にしようとして、この〈欲望〉を断念しようとはしなかったから。それ故彼の処刑は、父の勝利を顕示するものである。それとともに、この廻り遠い自殺によって彼は『すべてを生き直す』ことが、先ず適わぬ母との縁が可能となる。『彼女がなぜ生涯の終りで《許婚》をつくったのか、なぜ人生をくりかえすふりをしたのかわかったような気がした。』〔……〕この《許婚》とは、勿論ペレ(Pérez)つまり父(Père)のことであって、実に巧みな命名であるが、しかしそれは又、ムルソオが想像裡にライバルの地位を奪うことを差し迫った死が許す範囲内ではムルソオ自身のことでもある。そこで、処刑は父の最終的な抹殺を顕示することになる。殺されるがままになることによってムルソオは、検事が予告していた父親殺しの罪を犯す。即ち、〈欲望〉が〈法〉に勝ちを制するのであり、社会は痛く落胆して、『憎悪の叫び』を以てしかこのような挑戦を受けることはできないのである。』¹⁴⁾

このような解釈は、一方において、母に寄せる執拗な近親相姦願望の、他方においては、「強大なライバル、不在の父(語られること少なければそれだけ一層恐ろしく、自らを守ろうとしなければそれだけ増々威脅的な)」¹⁵⁾の

存在を前提している。そして又、ある個人の「対象選択はたぶん」小児期における両親（代理者）との対象関係という「原型にかなり自由に依存しながら、一般に行われる」¹⁶⁾のであるから、ムルソオも他の登場人物達と結ぶ関係において、彼の小児期に形成された原型的対象関係を大なり小なり再現していると考えられるので、『異邦人』の登場人物達は、二つのカテゴリーに配しうる。一方には、母親とその代理者としての女性達、つまりマリーやモール人の女がおり、他方には、不在の父親とその代理者としての男性達、つまりベレや裁判官や検事がある。〔……〕他の登場人物達は端役であるか、又はレエモン、サラマンそして自動人形の女のように、語り手の分身であることによって、息子達である」¹⁷⁾とされるわけである。

よく知られていることであるが、フロイトは息子の父親に対する関係については、そこに超自我や同性愛傾向の成り立ちの説明を求めたことから、時として曖昧な表現になっていることは否めないが、ともかくも反対感情併存 (ambivalence) を認めていた。しかし、息子の母親に対する関係については、最後まで、反対感情併存の発生は認めてもその存続は認めなかった。晩年に至って、女性におけるエディプス・コンプレックスの問題を扱うなかで、彼の理論の枠内でも最早息子の母親に対する関係にも反対感情併存を認めざるを得ない筈であるが、それでも「男児たちは自分の反抗的な感情をすべて父親のもとで処分してしまうことによって、母親に対するアンビヴァレンツを解消しうる」¹⁸⁾としたのである。勿論このような主張は、やはり同性愛的傾向の成り立ちの問題を視野に置きつつなされているのではある。即ち、フロイトの考えでは、息子にあっては「父親の側から幼時に経験した性の威圧と父親に対する競争的な立場とは同性の者を避けさせる働きをする」¹⁹⁾のである。

とすれば、『異邦人』解釈に当ってパンゴーが用意した精神分析学の「古典的な図式」は、メラニー・クライン等フロイトの後継者に与して息子の母親（代理者）に対する反対感情併存の存在を認める点でフロイトより一歩進

んでいるが、息子にとって父親は「恐ろしい」「ライバル」でしかないとき、フロイトより一步後退しているとしなければなるまい。

翻って、息子ムルソオの母親に対する関係にパンゴーが施している解釈は、観点や問題設定の仕方の相違を別にして、その結論のみを見る限り、そしてパンゴーの説く所に視野を限定する限り、拙論がこれまでに示してきた解釈と大差はない。即ち、母を亡くしたムルソオは「ムルソオと母の関係の《影》(doublet)」であるサラマノとその飼犬の関係に見られるのとは相違して、「母の死を悼むところまで行けない。そうしえないことが罪悪感の源」²⁰⁾であるが、ムルソオの「罪悪感の源」は更に遡る。何故なら、フロイトの言うように、病的な悲哀の元は、死者に向ける死別者の愛と憎しみの極端な反対感情併存にあるからである。ムルソオ自ら「すべて健康な人間は、自分の愛する者の死を多少とも希ったはずだ」(94)と言っている。「ムルソオは母の死を待ち望んだが、それがまるで母を殺したみたいなのである。そして彼が殺したのなら、彼が《失われた対象と運命を共にする》のは道理に適っている。それ故、殺人はやはり廻り遠い自殺なのである。」²¹⁾

だが、息子ムルソオの父親(代理者)に対する関係に目を転ずるならば、果してパンゴーの言うように「問題は多分もっと簡単である」²²⁾であろうか。判断を急ぐ前に、先ず、「ママが父について話してくれたこと」(154)とそれに対するムルソオの反応のうちに、そして彼の前で父親代理者の役を務めていると看做されうる登場人物達の、語り手ムルソオが語り描写する限りでの風貌や振舞いの中に、ムルソオにとっての父の原イメージを探る必要がある。次いで、母親の傍に現実にか想像裡にか父親の存在を意識して後は、父親(代理者)のイメージと相補的な関係に置かれて母親イメージも変容を蒙るであろうから、父親イメージに照し合わせて母親イメージを捉え返していく必要もあろう。そこで改めて、パンゴーのようにムルソオの母親に対する関係に「死の本能の顕われ」と「死そのものにそれと見紛うほど似ている」という「神話的」な「共同の永生」への密かな願望を読み込んで、「カミュ

はムルソオを介してその母親を《殺し》、それから自身の主人公を殺すとき彼は正に、回帰がもはや問題になることすらないこの幽遠な場所に彼らを住まわせているだけのことなのである」²³⁾とすることが正鵠を射た見方であるかどうかは問い直されることになる。

これまでの紹介で明らかなように、パンゴの解釈においては、専ら息子の母親に対する関係が扱われているのであって、その逆の母親の息子に対する関係、つまり息子に相対する母について息子が抱く母親のイメージは殆ど問題にされていない。フロイトは先に指摘したように、息子の母親に対する関係から反対感情併存を免れさせようとしてかなり苦しんだ節があるが、母親の息子に対する関係については確信を以て次のように語っている。「私有財産」や「性的関係についての特権」を廃してもなお人間性の「不死身の特性」として生き残り続けるであろう「攻撃本能」は「人間同士を結び付けるあらゆる情愛や恋情の底に沈む澱を成しているが、唯一つの例外はおそらく、母親の男の子に対する感情であろう。」²⁴⁾ というのも、「ただ男の子への関係のみが、母親に無制限の満足をもたらすのであり、それは一般にあらゆる人間関係のうちで最も完全な、最も双価性から離脱した関係なので」²⁵⁾あるから。『異邦人』の母親（代理者）から窺い知られる息子ムルソオの心中に宿る母親の原イメージは、このような愛の権現としての母親像であろうか、それともパンゴ自身はアイデアを示しただけでそれを展開させなかったが、もし彼の言うように「息子を断罪させるのは彼女〔死んだ母親〕なのだ」²⁶⁾とすれば、母親の原イメージは鬼女にも紛うものの筈である。たとえパンゴのようにムルソオの意識下に「共同の永生」への願望を想定するにせよ、母親の原イメージが正負いずれの相が支配的であるかによって、「共同の永生」への道行と「共同の永生」の内容そのものが異なってくるであろう。

以上、パンゴにあっては十分な展開を見ていない三つの問題点、即ちエディプス・コンプレクスの「古典的な図式」をさらに遡って母子の対関係まで問題化すること、『異邦人』における父親（代理者）のイメージの実態を

検討すること、両義性の観点から『異邦人』の母親(代理者)のイメージを再構成すること、は後に言及するであろうA. コストやJ. ガサンも拙論とは別様の観点と方法ではあるがそれぞれ試みている。

さて、以下は、幼少年期のムルソオが両親(代理者)との間に結んだ原型的対象関係の、拙論なりの観点と方法による復元の試みである。まず、成人した語り手ムルソオが顧みて自らの両親について語っている断片的な挿話から、語られていない「小児期の始めから」彼「を支配しているような母親の記憶像」²⁷⁾と父親の「記憶像」を仮説的に再構成してみる。次いで、この両親の仮説的な原イメージの諸特徴が両親代理者と目されうる他の登場人物達の個々の肖像のうちに見出されうるかどうかを検証される。そのための準備作業として、『異邦人』に登場する人物の一覧表を作成しなければならない。

表の作成に当って準拠した取捨選択と分類の基準は次の通りである。第一に、登場人物は、語り手によって、実在する者として扱われているか、想像上の乃至仮定的な人物として扱われているかである。想像上の人物とは、例えば「たった一日しか生活しなかった男」(113)のことであり、仮定的な人物とは、例えば、ムルソオの母には「看護婦をつける必要があった」(11)と院長が言う場合の「看護婦」のことである。いずれの場合も、登場人物の枠内には入れない。第二に、登場人物は直接的に登場するか、間接的に登場するかである。前者は、主人公の目の前に曾て現われたことがあるか、現に姿を見せているものとして語られている場合であり、後者は、他の登場人物からの伝聞として語り手によって語られている場合である。勿論、両様の仕方でも登場する人物も数多い。第三に、登場人物は、単独に現われるか、それとも集団の一員乃至集団そのものとして現われるかである。両様の現われ方をする人物もいる。集合名詞や複数名詞の下に集団として登場する場合、主人公又は他の登場人物の眼前に数などの具体的な特徴を伴って現われるときと、漠然としてはいるがなお時間・空間上の限定を伴っているときと、一般者として現われるときとがある。即ち、「葬儀屋 (les employés des pompes

funèbres) (22) は「司式者」(25) と「四人の黒服の男」(24) の総和という特定の指示対象を持っているし、「予審判事達 (les instructeurs)」は、数も編成員も不明で特定し難くなっているとはいえ、なお「マランゴで調査」を「行」(93) った人々という時間・空間上限定された指示対象を持っているが、「フランス国民 ([le] peuple français)」(151) となると全くの一般者である。尤も、主人公が母の埋葬の日に見掛ける「村人達 (les villageois)」(29) のように、漠然とでも特定可能とするか、一般者として扱うか判断に迷う場合もあるが、この場合は、「歩道上にいる」(29) という空間的限定を考慮に容れて一般者としては扱わない。又、法廷でムルソオが想起する「新聞売り ([les] vendeurs de journaux)」や「サンドウィッチ売り ([les] marchands de sandwiches)」は、文脈からしてその「叫び」や「呼び声」(137) が問題になっているのだから、一般者の部類に入れる。他方、事例は少ないが、登場人物が単独で現われる場合にも、一般者か否かの判別を要することがあり、例えば、「母とベレ氏はしばしば、夕方、看護婦に付きそわれて、村まで散歩に行った」(26) と言われているときの「看護婦 (une infirmière)」はその中身が代替可能な一般的存在である。このように、一般者であるや否やの判断は幾分の恣意性を免れない。一般者は登場人物の枠外に置く。第四に、登場人物は、男性か女性である。但し、男性の集合名詞や男性の複数名詞の下に集団で登場するとき、文脈から当然女性が含まれていると判断しうる場合もあれば、原理的には女性は除外されないにも拘らず作品全体という広義の文脈に照して、女性は含まれないか含まれる可能性は極めて少ないとすべき場合もある。例えば、「傍聴人 ([le] public)」(123, 130, 136, 137) や先の「村人達」の中には女性の姿が当然混っている筈であるが、「予審判事達」は、本来からすれば女性は排除されないが、『異邦人』では法曹界の登場人物達が全て男性であることを考慮すると、男性の部類に入れるべきだということになる。そこで、男性名詞であるから一応男性の欄に記入することになるが、女性が含まれていると看做しうる場合には、* 印を付すことにする。逆に、女性の

集合名詞で、男性の編成員を排除しないものは、女性の欄に入れて*印を付す。第五に、このようにして絞られてきた登場人物達も、例えば、全く口を利かない者も居れば、その発話内容が直接話法で示される者も居るというように、その現われ方は様々である。そこで、その登場の様態を四つの水準に別つ。即ち、i) その存在の確認がなされる、ii) その動作が描出される(発話行為そのものの単なる指摘をも含む)、iii) その外貌・服装(所持品を含む)・表情(声音、笑いを含む)・態度が観察される、iv) その発話内容が直接話法乃至間接話法で具体的な表現を伴って伝えられるか、少なくともその内容の大要が具体的に示される。i) には、本来すべての人物が入るのだが、ここでは、この水準でしか現われることのない登場人物のみをこの欄に記入する。例えば、ムルソオが牢獄で出会う「炊事夫」(111)が挙げられる。勿論理屈からすると、彼は少なくともii)の水準でも現われている筈だが、話者(この場合はムルソオ)がそれを語っていない以上、そうした事実はないと看做すのである。又、ii), iii), iv)すべての水準で現われる人物も居れば、そのうちの一つにしか登場しない人物も居る。登場箇所が確認しにくい、その他大勢で人物そのものが同定しにくいと思われる場合、及びある水準での登場が意外と感じられそうな場合には、その登場箇所の一つを『異邦人』原テキストの頁数で()内に示す。第六に、同じ登場人物が二つ以上の異なった呼称の下に繰り返し現われることがある。単独人物の場合は問題なく、適当なものを択ってあとは捨象することになるが、集団の場合には、複数の呼称の外延のそれぞれが互いにぴったり乃至ほぼ一致するとき、程度の差はあれ全体と部分の関係に立つときとがある。例えば、院長の言う、ムルソオの母と「同じ年輩の人たちのお友達 (des amis, des gens de son âge)」(12)や「在院者達 (les pensionnaires)」(23)は、ムルソオの言う「ママの友人達 (les amis de maman)」(18)や「老人達 (les vieillards)」(20-21)と、そして門番の言う「老いぼれども (les vieux)」(16)と同一の対象を指示していると考えられるから、このうちのいずれか一つを採ればよい。他方、「老女達」や

「男達」(18)は各々例えば「老人達」の部分であり、これと半ば重複することになるが、物語の中でひと纏まりの単位を成して固有の機能を果していると思われるので、それらも併せて採録することになる。だが、例えばムルソオの言う「たくさんの老人達 (beaucoup de vieillards)」(13)は「在院者達」のおそらくは部分であるが、ひと纏まりの集団として固有の機能を果しているとは認め難いので、「在院者達」とは別個の登場人物として採り上げることはしない。

以上のことを前提にして作成したのが以下の登場人物一覧である。

個人——直接的登場

	男	女	
(i) 存在	炊事夫 (111)		
(ii) 動作	ムルソオ 社長 養老院長 門番 ただひとり見詰めていた老人 (21) 老人のひとり (21) マランゴの司祭 (24) 聖歌隊の少年のひとり (24) ベレ 葬儀屋のひとり (26-27) 煙草屋の親爺 (36) 『ビエロの家』の給仕 (36) エマニュエル セレスト サラマン レエモン 警官 (56-77) マソン	「二人のアラブ人」のひとり (80-81) 「レエモンの相手」のアラブ人 (85-87) 予審判事 弁護士 書記 (96-97) 接見所の看守 (105-106) 「帽子を手にした男」(108) 「ひとりの囚人」(108) 看守長 (111) 「二人の憲兵」のひとり (118) 「新聞記者のひとり」(120) 検事 廷吏 (121) 裁判長 「若い」新聞記者 (122) 刑務所付司祭	ムルソオの母 (12) アラブ人の看護婦 (14) 霊安室で泣く女 (19-20) 看護婦代表 (24) マリー レエモンの情婦 (55-57) 自動人形の女 (66-67) マソンの妻 (81) 「小柄な老婆」(108) 「肥った女」(105)
(iii) 外貌	ムルソオ (26) 社長 軍人 (11) 養老院長 門番	ただひとり見詰めていた老人 (21) 老人のひとり (21) 聖歌隊の少年のひとり (24)	アラブ人の看護婦 (14) 看護婦代表 (24) マリー 「様子のいい男」の妻 (35) 「様子のいい男」の娘 (35)

カミュ『異邦人』における「無関心」(鈴木)

	司式者 (25) ベレ 葬儀屋のひとり (27) 御者 (28) 「様子のいい男」(35) エマニュエル (41) セレスト サラマノ レエモン マゾン 「二人のアラブ人」のひとり (83) 「レエモンの相手」のアラブ人 (86)	予審判事 弁護士 「大男」の囚人 (106) 「小柄な青年」の囚人 (107) 「帽子を手にした男」(108) 「新聞記者のひとり」(120) 特派員 (120) 検事 裁判長 「若い」新聞記者 (122) アイスクリーム売り (148) 刑務所付司祭	自動人形の女 (66-67) マソンの妻 (75) 「小柄な老婆」(105) 「肥った女」(105)
(iv) 発話	ムルソオ 社長 軍人 (11) 養老院長 門番 マランゴの司祭 (24) ベレ 葬儀屋のひとり (27) 「競技者のひとり」(37) エマニュエル (41) セレスト サラマノ レエモン 警官 (56-57) マゾン 予審判事	弁護士 「大男」の囚人 (106-107) 「小柄な青年」の囚人 (108) 看守長 (111) 「二人の憲兵」のひとり (118) 「二人の憲兵」のもうひとり (118) 「新聞記者のひとり」(120-121) 検事 裁判長 弁護士の同僚のひとり (149) 刑務所付司祭	ムルソオの母 (159) 門番の妻 (16) 看護婦代表 (29) マリー レエモンの情婦 (56-57) 自動人形の女 (66) マソンの妻 (78) 「肥った女」(106-107)

個人——間接的登場

	男	女
(i) 存在	「職場の同僚」(69) 「チェコの男」の息子 (114)	「ある人殺しの男」(155)
(ii) 動作	ムルソオ (128) 養老院の往診医 (23) ベレ (26) 「レエモンの相手」のアラブ人 (45-46) 医師 (81) 「チェコの男」(113-114) 特派員 (120)	陪審員長 (151) ムルソオの父 (154-155)
		ムルソオの母 (26) レエモンの情婦 (47-48) サラマノの妻 (69) マソンの妻 (78) ジャンヌ (106) 「チェコの男」の妻 (114) 「チェコの男」の母 (114) 「チェコの男」の妹 (114)

(iii) 外 貌	ムルソオ (127)	ベレ (23)	レエモンの情婦 (47-48)
(iv) 発 話	葬儀屋のひとり (127) レエモン (106) 「レエモンの相手」のアラ	ブ人 (45-46)	ムルソオの母 (13) 霊安室で泣く女 (20) レエモンの情婦 (47)

集団——直接的登場

	男		女
(i) 存 在	マランゴの村人達 (29)* 「たくさんの若者達」(32)* 「観客の波」(37)* 「沢山の人々」[アバートの	住人達] (56)* 「大部分がアラブ人」の「十 人程の囚人達」(105)	モール人の女達 (105)
(ii) 動 作	「彼ら〔セレストの店の常 連達, セレストを含む〕 (10)* 養老院の在院者達 (18-21)* 会社の同僚達 (22)* 葬儀屋 (24) 「二人の小さな男の子」 (35) 「場末町の青年達」(35) 競技場の見物人達 (37)* 競技者達 (37) 散歩者達 (37)* 「観客の波」の中の「若者 達」(37) 「若者達」(38) 「一団のアラブ人」(73)	「二人のアラブ人」(79) 「大部分がアラブ人の囚人 達」(104) 「大部分のアラブ人の囚人 達」(106) 「二人の憲兵」(118) 陪審員達 法廷の「すべての人々」 (119-120)* 三人の裁判官 (121-122) 「これらの〔検事側の〕人々 すべて」(127) 傍聴人 (123)* 新聞記者の「一団」(119) 弁護士の同僚達 (149) 看守達 (170)	「近所の娘達」(38) 「家族連れ」(35)* 「大部分のアラブ人の囚人達」 の「家族達」(106)*
(iii) 外 貌	「彼ら〔セレストの店の常 連達, セレストを含む〕 (10)* 男の在院者達 (18) 在院者達 (21)* 葬儀屋 (24) 「二人の小さな男の子」 (35) 「場末町の青年達」(35) 競技者達 (37) 「観客の波」の中の「若者 達」(122)	達 (37) 「一団のアラブ人」(73) 「二人のアラブ人」(79) 「大部分がアラブ人の囚人 達」(104) 「大部分のアラブ人の囚人 達」(106) 陪審員達 (146) 三人の裁判官 (121) 傍聴人 (130)* 新聞記者の「一団」(122)	「老女達」[女の在院者達] (18) 「近所の娘達」(38) 「大通り」の女達 (65) 「大部分のアラブ人の囚人達」 の「家族達」(106)*
(iv) 発 話	「大部分がアラブ人の囚人 達」(104)	「二人の憲兵」(118) 弁護士の同僚達 (149)	

集団——間接的登場

	男	女
(i) 存在	「僕の知らない人達」(79)*	
(ii) 動作	葬儀屋(22) 「一団のアラブ人」(63) 予審判事達(93) 犯罪人達(100)*	「他の者〔囚人〕達」(111) 死刑囚の中で「一番惨めな 人達」(166)*
(iii) 外貌		
(iv) 発話	養老院の在院者達(126)*	レエモンのやくざ仲間 (49)

(括弧内の数字は『異邦人』原テキストの頁数を、又*印は男女混合の可能性を示す。)

この表を一目見るだけで、誰しも即座に気付くであろうことが二つある。一つは、登場人物は個人であると集団であるとを問わず、又登場が直接的であると間接的であるとを問わず、殆どすべての水準において、男性の数が女性のそれを圧倒していることである。勿論このことだけでは、異とするに足りないかも知れない。作者は男性であり、主人公＝語り手も男性であるからである。だが、いま一つの特徴的な現象がそこに加わると、それは格別の意味合いを帯びて見えてくる。いま一つのこととは、女性の登場人物達は、マリーを唯一の例外として名前(prénom)を持たず、「看護婦」(infirmière, garde)以外の職業に就いていず、彼女達はただ、「女(達)」(femme[s]),「娘(達)」([jeune[s]] fille[s]),「老婆」(vieille),「老女達」(vieilles femmes),「モール人の女(達)」(Mauresque[s])と、「母/ママ」(mère/maman),「妻」(femme),「情婦」(maitresse)と呼ばれているにすぎないことである。マリーにして「元タイピスト」(32)なのであって、ムルソオと再会した時点では何らかの職を持っているかどうかすらも不明なのである。こうして、数において男性の登場人物が女性のそれを圧倒している事実と女性の登場人物の殆どが無名の存在に留まっている事実は符合して、一つのことを語っていると言える。つまり、主人公＝語り手ムルソオが生き、語る『異邦人』の世界は、社会的

地位も職業も、そして名前すらも男達が独占する、少なくとも見掛け上は、「男 (homme)」(45, 46, 52, 57, 84, 131) 中心の世界なのだということを。

更に、これは必ずしも容易には気付かれないことであるが、男性の「アラブ人(達)」は女性の登場人物と同等の位地に置かれていることが上の表から判る。というのも、彼等は、「アラブ人(達)」、「囚人達 (détenus, prisonniers)」(104, 106) と、又「兄 (frère)」(46), 「相手 [奴] (type)」(45, 80, 85), 「仇 (adversaire)」(83), 「男 (homme)」(92), 「身体 [死体] (corps)」(88, 98), 「被害者 (victime)」(135) と呼ばれているに過ぎないからである。この問題は次節で論及することになろうから今は指摘するに留めておく。

さて、上の表に挙げたすべての登場人物について考察することはできないし、又それは無用のことでもある。そこで、物語の中で果している機能の軽重如何が問われることになるわけだが、価値判断の客観的基準というものはあるのだろうか。一般的には、とりわけ iv) を含んですべての水準で登場する人物はそうでない人物より重要度において優るとすべきであろうが、少なくとも『異邦人』においては必ずしもそうは言えない。例えば、「新聞記者のひとり」(120-121) はすべての水準で登場するが、iv) を欠く「小柄な老婆」(105, 107-108) より重要な人物であるとは言えない。又、これも一般的には、直接的に登場する人物は間接的に登場する人物よりも、その登場が度重なる人物はただ一度しか登場しない人物よりも重要な役目を担っているとすべきであろうが、『異邦人』においてはやはり必ずしもそうではない。例えば、主人公に直接的に識られる上に、たとえ犯行のあった日曜日全体を長いシーケンスと看做すとしても証言台に立つことによって物語の中に少なくとも二回は顔を出すことになるマソンは、間接的に、それもたった一度しかその存在が知られないムルソオの「父」(154-155) より重要な人物であろうか。更に、一般的には、たとえ姓だけであろうともかく名付けられていることは、全く無名の人物より重要度において優る一つの証とすべきであろうが、例えば姓名を持たない「小柄な老婆」はマソンより、少なくとも拙論の観点

からは、はるかに重要な人物であると見える。従って、名前があり、直接的に識られ、幾度も姿を見せ、とりわけ iv) を含んで多くの水準で登場する人物が一等重要な人物であるという常識的な判断は『異邦人』についても勿論有効であることは間違いないが、厳密には、取捨選択の公平な基準というものはなく、読者の観点次第で主要人物の内訳はある程度変るとしなければならない。拙論の観点から選び出した、父親(代理者)、母親(代理者)、息子(代理者)の内訳を以下に示す。

父親(代理者): ムルソオの父, ベレ, サラmano, 社長, 門番(=フィジャク), 養老院長, 弁護士, 予審判事, 刑務所付司祭, 検事 / 裁判長, 陪審員, 軍人, マランゴの司祭, 養老院の男性の在院者達, 葬儀屋の一人, 警官, 憲兵, 看守長, 等々。

母親(代理者): ムルソオの母, マリー, 「モール人の女」(=レエモンの情婦, アラブ人の妹), 「自動人形の女」, 「チェコの男」の母 / アラブ人の看護婦, 看護婦代表, 「小柄な老婆」, マソンの妻, サラmanoの飼犬。

息子(代理者): レエモン, セレスト / ムルソオ, エマニュエル, マソン, 「小柄な青年」, 「若い」新聞記者, 「チェコの男」。

斜線で区分した前半に挙がっている人物達は以下において項目別に扱う人物達であり、後半の人物達は、必ずしも副次的な人物というわけではなく、論述の便宜上項目としては立てず、機会のあり次第その都度論及するであろう人物達である。

実際には、この分類程にはすべての人物の果す役割が判然としているわけではない。「かなり若い」(93)と言われている弁護士には初めから父親代理者の資格が十全に備わっているとは言い難い。サラmanoとその飼犬には、ムルソオの分身としての役割もある。レエモン、そして特にセレストの持つ、父親代理者としての側面も見逃せない。従って、上の分類は一応の目安である。又、この分類のどの項にも、誰しも主要人物の一人として認めるであろう、ムルソオに殺されるアラブ人の男は入っていない。彼の果している役割

如何については次節で論ずる予定であるから、この節では扱わない。

以下項目別に見ていくが、息子代理者達については父親（代理者）の枠内で付随的に考察する。

A. 父親イメージ

(1) ムルソオの父——『異邦人』全体に亘ってもムルソオの父親はただ一回だけ、それも次のような挿話の中で姿を見せるにすぎない。「こういうとき、僕はママが父について語ってくれた話を思い出した。僕は父を知らない。僕がこの男について正確に知っていることは、おそらくそのときママが言ってくれたことだけだ。彼はある人殺しの処刑を見に行つた。そこへ行くと思っただけで身体の具合が悪くなった。しかし彼は実行して、かえってから昼ちかくまで吐きつづけた。そのとき、僕は父に少し嫌悪感を抱いた。今では、それが分つた。それはごく自然なことなのだ。どうして僕は分らなかつたのだから、死刑執行ぐらい重大なものではなく、結局のところ、これが人間にとって真に興味ある唯一の事なのを！ 万が一この牢を出ることがあつたら、僕はすべての死刑執行を見に行こう。こういう可能性を考えるのは間違ひだつたと思う。ある日の早朝、非常線のうしろ、いわば反対側で自由の身である僕を想像し、見にきたあとで吐いたりすることのできる見物人になることを想像すると、毒々しい歓喜の波が胸にわき上ってきたからだ。しかしそれは理性的ではなかつた。こういう仮定に身をまかせるのは間違ひだつた。そのせいで一瞬間の後には、僕はおそろしい寒気を覚えて、掛布団の下でちぢこまり、堪えられなくなって歯をかちかち鳴らしたから。」(154-155)

「死刑執行」(exécution capitale)が「頭〔首〕の」(capitale)「処刑」(exécution)であり、「人間」(homme)が「男」(homme)でもあるからには、「死刑執行」が「人間〔男〕にとって真に興味ある唯一の事」であると作者が語り手に言わせるとき、作者は断首刑の持つ「去勢の無意識的暗示」²⁸⁾を十分意識していたに違ひない。だから、この一節はテーマからして、少なくとも古

典型的な精神分析的解釈にとって大層誘惑的な箇所であることは勿論だが、他方では、作者の側からの誘導にも又警戒を要するのである。

パンゴールの考えでは、この一節は「エディプスの抗争の古典的図式に従って解釈されうる。即ち、父親がその処刑を見にやって来る被告というのは、母親を我が物にしようとした息子なのだ。ムルソオは罪を認め、罰を『自然な〔当然の〕こと』だと思う。』²⁹⁾しかし、仮に「エディプスの抗争の古典的図式に従って解釈」するとしても、パンゴールが言う程事は「簡単である」とは思われない。「図式」に頼る前にもっと注意深くテキストを読んでみよう。「正確に知っていることは、おそらく」と言うからには、不「正確」なことなら他にも未だ「知っている」ことがあるというわけである。が、「正確」(précis)つまり首尾一貫していて曖昧なところがなく鮮明な印象を結ぶ「話〔物語〕」(histoire)としては「おそらく」これ以外には無いということだ。それは一方においては、母親がムルソオに「この男について」他に何もまとまった「話」をしなかったことを意味しうるが、他方では又、とりわけこの「話」が幼少年期のムルソオにとって想像裡にその場面がありありと目に浮かぶ程強い印象を与え、記憶に深く留められたことをも意味している。そして、何故こんな「恐ろしい物語」だけが心に焼き付いたかといえ、それは「不安をいだきやすい小児たちは他の小児にはまったくなじもうとしないような物語だけをうけいれるものである」³⁰⁾からである。その「物語」は「人殺し」の「死刑執行」を内容としていて、それだけでも十分「恐ろしい」もので小児の「不安」を掻き立てるであろうが、自分の「父」が見物人として加わることによって「恐ろし」さは倍増しよう。というのも、小児の心の中に自分の母親に対する「近親姦的な空想」³¹⁾の存在と、それと相関的な、競争者である父親への敵意を想定すると、「空想」が執拗であればそれだけ敵意も強化され、敵意は投影されて父親は増々恐ろしい威脅的な相貌を呈してくるから、小児の「不安」は常々父親の挙措をめぐるって過敏になっているからである。このような小児から見ると、父親は「処刑を見物しよう」と決心

すること」によって「死刑執行人の自発的な荷担者」³²⁾になるのであり、息子は「人殺し」と自分を同一視して、断首刑に「去勢の無意識的暗示」を感じ取っているというわけである。だが、仮にそこまで認めたとしても、次いで「ムルソオは罪を認め、罰を『自然なこと』だと思う」と言ってよいのだろうか。

テキストを見直してみよう。「こういうとき」とは、「いま僕に興味があるのは、ただ機械の運行から逃れること、不可避にどこか抜け道があるかを知ることだ」(153)と言って「抜け道」をあれこれ考えているときのことなのである。そうした文脈からすれば、ムルソオが「罪を認め、罰を『自然なこと』と思う」わけがないのである。実際、先に引いた一節に限ってみても、彼が「可能性」や「仮定」に思い耽るのは、「罪を認め、罰を『自然なこと』と思」って断頭台に上る自分のことについてではなく、「いわば反対側で自由の身である」自分であり「見に来た後で吐いたりすることのできる見物人」としての自分、つまり「父」の立場にある自分についてなのである。「一瞬間の後には、僕はおそろしい寒気を覚えて、掛布団の下でちぢこまり、堪えられなくなって歯をかちかち鳴らした」というのも、そうした「想像」から醒めて処刑台に上るのは自分以外の誰でもないのだという現実直面するからなのであり、「罰を『自然なこと』と思」ってなぞいないからなのである。

「それはごく自然なことなのだ」と言うとき、「それ」とは、「罰」を指さないとすれば、何のことか。「僕はすべての死刑執行を見に行こう」と言っていることを考慮すれば、「父」が「処刑を見に行った」ことを指していることになる。だが、「見に来た後で吐いたりすることのできる見物人になることを想像する」方を考慮に容れれば、「父」が「帰ってから昼近くまで吐き続けた」ことを、あるいはそのことをも指しているとも考えられる。同様に、「僕は父に少し嫌悪感を抱いた」のは、「父」が「処刑を見に行った」からだだろうか、それとも、あるいはそれとともに、「父」が「そこへ行くと思

ただで身体具合が悪くなった」が、にも拘らず「実行して、帰ってから昼近くまで吐き続けた」せいだろうか、やはり曖昧である。

第IV章の(3)『ムルソオと母』の項で仔細に見たように、そしてパンゴーも言っているように、「死んだ母」は物語全体に遍在している。又、ムルソオは、とにもかくにも、「ママを深く愛している」(94)と言っている。それにひきかえ、彼の父親の方は物語の中でただ一度だけ、それも「少し嫌悪感を抱」かれる人間として登場しているのである。更に、「僕は父を知らない」とすると、ムルソオの幼年期のかなり早い時期には「父」はもうムルソオの目の前から姿を消していたことになる。離婚したか、失踪したのか、それとも病死したのか。いずれにしろ、物心ついて父の不在に気付いた子供は、父によって遺棄されたと受けとめた筈である。幼い自分に情愛深かった父の面影を伝える「話」が、少なくとも「正確に」は、母から語られていないのだから尚更のことである。又、『ムルソオの母』の項で詳細に論ずるであろうが、ムルソオの「唯ひとりの」(11)肉親とも思われる彼の母が、小児が「愛している人物」であるにも拘らず「確かに愛してくれていると信じ」³³⁾ることのできない、「不安」をいつも掻き立てる母親であったとすると、そこに生ずる母に対する敵意は、「愛している人物」を破壊し尽くさないために、そして「愛してくれていると信じ」続けることができるためにも、母その人に向けることはできず、元々は母に対するものである「自分の反抗的な感情をすべて父親のもとで処分してしまうことによって、母親に対するアンビヴァレンツを解消し」ようとするであろう。父が自分を「愛してくれてい」た何の証もなく、自分は父を「愛している」どころか「恐ろしい物語」の主人公に対する恐怖と、遺棄された恨みしかなく、又そんな「物語」しか息子に語り伝ええない母親の、父への情の薄さが感じとられもしようから、父親は誰憚ることのない「反抗的な感情」の恰好的になる。他方で、それだけ父からの報復の虞も強まることになる。かくして、「恐ろしい」、「威脅的な」父という「幻影」³⁴⁾ができ上る。一面においては、息子はこのような「幻影」

を歓迎してもいるのである。何故なら、「幻影」が「威脅的」であればそれだけ「父親のもと」で「母親に対するアンビヴァレンツを解消しうる」から、そして母が自分を「愛してくれていると信じ」続けることができるからである。

だが、「話」は更に続く。「話」の中の「父」は「恐ろしい」、「威脅的な」父という「幻影」を支え切れない。「そこへ行くと思っただけで身体の具合が悪くなった」のである。それは、もし「父」の情愛深い一面を伝えるような「話」が他にあったなら、「父」の繊細さと優しさを示すものとして受け取られもしたであろうが、今はただ気の弱さを示すと見えるだけである。

何故「父」は「処刑を見」たいと思ったのか。作者カミュの実父のように、「断首刑でも軽すぎると考えて」義憤に駆られ、「子殺しの殺人犯」の最後を見届けたくて「真夜中に起き」て、夜明けに刑が執行されるという刑場に馳せ着けたのだらうか³⁵⁾。もしそうなら、見方によっては、おっちょこちょいだが愛すべきとも言えそうな正義漢振りをそこに見ることもできよう。おまけに、犯罪は「子殺し」なのだから、子煩悩が昂じた父親の姿を想い描くことも許されよう。だがムルツオの「父」の場合には、「人殺し」の犯罪も、父が「処刑を見に行った」動機も不明なのである。この「話」だけを聞く限り、「父」は物好きとしか言い様がない。そして、「そこに行くと思っただけで身体の具合が悪くなった」という程の気の弱さを押しても事を「実行」せずには已まない好奇心の強さというものは、単に物好きから「見に行った」と聞かされる以上に、サディズム的な残酷さを感じさせる。サディストは元来臆病者なのである。「実行して、帰ってから昼近くまで吐き続けた。」自分の気の弱さをも弁えずサディズムを潜めた好奇心に負けて「見に行った」父親は、やはり心の弱さを暴露したのである。この「話」を聞かされた子供は、「そのとき、僕は父に少し嫌悪感を抱いた」という口吻によく窺われるように、一方において父親の潜在的なサディズム的衝動に怯えるとともに、他方においては、父親の弱さへの憐愍と、気の弱さをも弁えず残酷

なものを敢て「見に行った」愚かしさへの軽蔑を覚えたに違いない。つまり、幼少年期のムルソオが首尾一貫した「話」として記憶に留められる程に、繰り返し聞かされたと思われるこの「恐ろしい物語」から作り上げられた「父」の原イメージは、サディズム的な残酷さに彩られた「恐ろしい」、「威脅的」な「父」と、他方における、同情と軽侮を誘う腰弱な「父」とに分裂していると言うことができる。

確かに、幼いムルソオが母の語る「話」を理解して「正確」に記憶に留めるためには、少なくとも、三歳から五歳に亙るというエディプス期の言語能力が必要であろう。だから、母が息子に語り聞かせた「話」とそこに淵源する上のような両義的な父親イメージの成立をエディプス・コンプレクスの文脈で説明することも全く根拠の無いこととは言われぬであろう。即ち、先ず「近親相姦的な空想」に耽る男の子がおり、母の「話」は去勢脅迫と受け取られる。「死刑執行人の自発的な荷担者」としての「父親と去勢者(去勢する人)との同一視」が一方において起こり、それ故の「激しい無意識的な父親に対する敵意」³⁶⁾が発生する。他方においては、父親は「身体の具合が悪く〔病気に〕」なることによって彼自身が「ギロチンによって去勢された」³⁷⁾と息子の目には映るのであって、そこで「むしろ父親の方が被去勢者(去勢された人)の意味を持ち、したがって父親に対して〔……〕同情が喚起されたというような反対の流れ」³⁸⁾が認められることになる。こうして、「被去勢者であり且つ去勢者である(à la fois castré et castrateur)」³⁹⁾、又「物笑いの種であると同時に去勢者でもある父の原イメージ(l'imagο paternelle, à la fois dérisoire et castratrice)」⁴⁰⁾ができ上る。結局、去勢脅迫は竜頭蛇尾に終り、近親相姦願望は温存される、というわけである。

だが、父親の原イメージの源は更にエディプス期以前にまで遡って問われうる筈である。何故ならば、父親はエディプス期になって初めて、降って湧いたように息子の前に姿を現わすわけではないからである。

エディプス期以前の母子の対関係において、どのような親子の間であって

も、幼児の「母親に対するアンビヴァレンツ」は避けられないし、又ある時点からは乳幼児の心身の発達を促す上で必要不可欠なことでもある⁴¹⁾。ただ常態においては、「乳〔幼〕児の破壊性と、愛情や償いたいという衝動との間の、たえざるたたかい」⁴²⁾において「愛情や償いたいという衝動」が勝っているから、母親という同一の対象上で「アンビヴァレンツ」は統合されてゆくので、そのうちの「反抗的な感情をすべて父親のもとで処分してしまう」必要はないし、又それは「ともども同時にすすむ」という「自我の統合と対象の統合」⁴³⁾を却って阻害するものである。

この前エディプス期からエディプス期にかけての息子と父親の関係について、フロイトは次のように述べている。「エディプス・コンプレクス以前の生活史」において、「幼い男の子が父親に対して特別の関心をあらわすことがあるが、それは自分も父親とおなじようにありたいし、またそうなりたい（強調は原著者）、すべての点で父親のかわりになりたい、という関心である。客観的にいうと、彼は父親を理想とするのである。この態度は父親（そしてまた男性一般）にたいする受身的な、あるいは女性的な態度とはなんの関係もなく、むしろすぐれて男性的なものである。それは、よくエディプス・コンプレクスと調和していて、その準備をすすめるものである。

この父親との同一視と同時に、おそらくはそれ以前にも、男児は、母親にたいする依存型の本格的な対象備給を向けはじめる。ここで、彼は二つの心理的に異なった結合を示す。すなわち、それは母親にたいする自然の性的な対象備給と、父親にたいする典型的な同一視である。この二つは、しばらくのあいだ互いに影響も妨害もなく並存するが、精神生活はたえず統一の度をつよめてゆく結果、これらはずいに触れ合い、その合流によって、はじめて正常なエディプス・コンプレクスが成立する。子供は、父親が母親の傍にいて自分の邪魔をしているのに気づく。彼の父親との同一視は、いまは敵意のある調子をおびてきて、母親にたいして父親のかわりになりたいという願望とひとしいものになってゆく。」⁴⁴⁾ 息子と父親との関係を説明する際にフロ

イトが常に傍らでは男性の同性愛的傾向の成立過程の問題を意識していることが、筆者が傍点を付した所に明らかに見てとられよう。この一節が描く息子の父親に対する関係は、先ず「特別な関心」であり、次いで「敵意」であるに過ぎない。ところが、これに先立つ別の著書の中でフロイトは、エディプス期にあって「同じ小児が同時にまた別の機会には、父親に強い情愛を示す」⁴⁵⁾という観察を記しており、更に、これより後の著書においては、エディプス期の父と息子の関係を次のように説明するようになる。「少年の父親に対する関係は、[……] アンビヴァレント(両立的)なものである。競争者としての父親を亡きものにしたいという憎悪感のほかに、父親に対する一定度の愛情が存するというのが通常である。この二つが合併して、自分を父親と同一視するという現象が起こる。一方では、父親を嘆美するがゆえに父親にとってかわりたいと願ひ、他方では、父親を亡き者にしたいがゆえに、父親のごとくありたいと願う。」⁴⁶⁾つまり、エディプス・コンプレクスが父親同一化に収束する態で克服に向けて潜伏期に入るためには、息子が「憎悪感」の他に、それと対立する「一定度の愛情」や「嘆美」の念を、「恐怖ばかりでなく尊敬や関心をも抱いている」⁴⁷⁾ことが必須の前提となるわけである。

「嘆美」や「尊敬」の念は、多くは比較するところから生まれるものであるから、エディプス期の「競争」関係にその由来を専ら求めることができるとしても、エディプス期に至って突如息子が父親に「一定度の愛情」を抱くようになるというのは不自然であって、それが一方での「憎悪感」に対する反動形成でないとするならば、既に芽生えは「特別な関心」と同じ時期にあるとすべきであろう。無論それは、前エディプス期における幼児の「次第にとつともない強烈さをもって来る」という「現実に母親を求める欲求」⁴⁸⁾を「愛情」と呼ぶならば、比較にならぬ程影の薄いものではあるが。そして、「特殊な関心」が主に「恐怖」に染まったものであるか、それとも「愛情」に、そしておそらくは早くも幾許かの「嘆美」の念に、より多く動機付けられたものであるかによって、早々と前エディプス期において、息子が父親を

做すべき「理想」として仰ぐか否かが定まる、あるいは少なくともいずれかに強く方向付けられる筈である。

いま一つ大事なことは、前エディプス期における息子の父親への態度には、そこに「恐怖」と「愛情」と「嘆美」の念が^な緋い交ぜになっているにしても、やはり「特別な関心」としか名付けようのないものが前景を占めていることだ。つまり、父親（代理者）は幼い息子にとって、最初に出会う「男性」の「理想」なのである。フロイトが「特別な関心」を「すぐれて男性的なもの」とするの^もこの故なのである。

「幼児はごく幼い頃から内受容的、皮膚感覚的な体験に主として依拠しながら、父親や母親との交渉をとおして、すでに男性と女性の身体的存在様式をおぼろげに識別し、漠然とながらまとまりをもったイメージとして類別しつつあるのではなからうか」⁴⁹⁾と服部は言う。それは「分析不可能な漠としたイメージであるが、決して不確かなものではない。」⁵⁰⁾ 母親に比べて、「父親が幼児を取り扱うしぐさは、もっと粗く大まかで、幼児と父親との協運動はたくさんのズレや余白がある。男性の対象措定的な認識と行為が幼児に向かうとき、それは幼児にその背後の疎遠な世界を予感させる。」⁵¹⁾ つまり、父親（代理者）は幼児が心中に育むべき男性イメージの原型と、少なくともその主要な構成要素となるのであり、母との二項の対象関係とは異質な「疎遠な世界」への水先案内人なのである。それと対応して、幼児の方はそうした父親に「特別な関心」を示す。それはつまり、幼くして男の子は男性イメージの範を自ら求め呼び寄せるということであり、「疎遠な世界」即ち「自分を事物や他人に対し鋭角的に対峙させ、自身の身体で抵抗物にうちかって目指す状態をつくり出そうとし、他方では、抵抗物として自分の前にあらわれる事物の客体的な性質に関心を持つ」⁵²⁾という勝れて「男性」的な世界に^{みづから}魅かれてゆくのであり、前エディプス期においてすら母親との対関係から出立しようとする気構えが早くも見てとられるということなのだ。

所謂エディプス期には、確かに性的な関心の急激な昂まりとともに、男の子にとって、とりわけ母親が「近親姦的な空想」の対象としても現われ、それと同時に、父親が同じ性的対象の専有を争う「競争者」としても現われる。ただこのとき、そうした事態と並行して、男の子の自我の形成と男性性の自覚も著しい進行を見せるのである。それを併せ考えるならば、性的対象としての母をめぐる男の子が一個の男児として父と覇を競うということ、つまり男の子の分離独立がエディプス・コンプレクスの重要な契機であるとも言えるであろう。母親は性的対象になることによって、その限り性的対象としての他の異性にとって代られうるものとなるのであり、父親は相競う形で倅いつつ凌ぐべき対象となるからである。

そうしてみれば、やがて男の子が「近親姦的な空想」を手放していく道行は、「去勢威嚇」の形をとって現われる父親の側からの近親相姦の禁止によって、罰として「陰茎を失う危険があるという印象のもとに、エディプスコンプレクスは見捨てられ、抑圧され、ごく正常な場合には徹底的に破壊されます」⁵³⁾というのではなく、前エディプス期からエディプス期を通じて「幼児が独立する必要のある同じ速度で、幼児から離れること」⁵⁴⁾が過不足なく可能な「適切な母親〔ほぼ良い母親〕」(Good-enough Mother)⁵⁵⁾の態度、つまり子離れと、幼い息子の側からの相対的な母親離れ、つまり分離独立の欲求の増大、そしてそれと相関的な、大体年齢を同じくする主に同性からなる集団即ち「疎遠な世界」への参入という経過を辿るのであると言えよう。

フロイトの言うようにもし「いわゆるエディプス・コンプレクスがたどる正常な運命」なるものが「少年は、去勢されては大変だという不安から、すなわち自分の男性としての存在を守りたいという利害打算から、父親を亡き者にして母親を所有しようという願望を捨てる」のでは、「父親を亡き者にし」ようとする「願望」も、そしてそれが派生してきた元々の「母親を所有しようという願望」も、いずれもただ抑圧されて「無意識のうちに残存しつづける」⁵⁶⁾ばかりであろう。そして、この未解決のエディプス・コンプレクス

は思春期までそのまま持ち越され、激烈に再燃するというのであるから、「息子は、リビドによる自分の願望を母親から離し、だれか現実の肉親以外の愛の対象を選ぶようにさしむけ」、それによって「父親と宥和する」か「父の威圧のもとから脱出する」という「解決」は至難のことであり、そうした文脈からすれば、エディプス・コンプレクスの「解決」が「心理的にも社会的にも正しい姿でなされることがどれほど少ないか」⁵⁷⁾というフロイトの嘆きも宜なるかなと言われえよう。

だが、男の子が去勢不安によって「近親姦的な空想」から離れていくとしても、それは、「男根期」の「幼児手淫」として具体的には現われてくるという近親姦願望に対応して「男根を切断するといって子供をおどかす」⁵⁸⁾といった「去勢威嚇」が一方でなされ、そこに「女が男根を失っている事実〔……〕を見」ることが相乗的に働き、「この二つの経験の共同作用」⁵⁹⁾から去勢という「外部危険」への不安が募って「母親という対象を放棄することによってその危険から免れなくてはならないとその男の子が思いこむ」⁶⁰⁾という意味ではない。そうした意味合いでの去勢不安は、「抑圧の、そしてひいては神経症形成の最も頻繁で最も強い推進力の一つである」⁶¹⁾ばかりではなく、それ自体既に一つの「神経症的「形成」物とされなければならないであろう。そうではなくて、男の子が「母親という対象を放棄する」のは、「外部危険」ではなく、あくまでも「内部危険」⁶²⁾に対する不安からなのである。即ち、近親姦的な母親拘束こそが去勢不安を惹き起こすと言うべきなのである。

何故ならば、幼児の「ある瞬間母親と合体し共感を求めるか」と思うと、次の瞬間には母親から独立して、前もって幼児の欲求を知っているような母親を危険視、つまり魔女視する」という「ひとつの状態と別の状態とのあいだを往来する」⁶³⁾傾向は、既にエディプス期以前に始まり、次第にその「往来」の間隔が間遠になるとはいえ、エディプス期を通じても確認される。エディプス期におけるこの「合体」傾向の極端な表われが、母親（代理者）との

「交接願望の代理」としての限りでの「母胎への回帰という、よく聞かされる空想」であり、去勢によって「陰莖を喪失してしまうと、その結果、母親またはその代理と性行為によって再結合することが不可能になってくる」から「去勢不安」⁶⁴⁾が生まれるのだと言えるにしても、他方では、「陰莖」は男の子の「独立」とそれと相関的な「男性としての存在」の形成に当って要として機能しているのである。即ち、男根期の遙か以前から、幼い男の子は自分の男根に関心を払いそれを操作することを通じて「早くから『自分の身体』に対する客観的な認識をもち、道具として支配し、他方では他人のまなざしから自立させた領域としているように見える。」つまり、自分の男根を介して彼は「自分の領域と他人の領域を区別」⁶⁵⁾することを、「独立」することを学ぶのである。「独立」が「疎遠な世界」への参入によって初めて果されたと言える限り、そしてそこで初めて「肉親以外の愛の対象を選ぶ」可能性が拓かれるのであり、近親姦的な母親拘束は男の子の「独立」を、「独立」に向けて働くべき男根の機能を妨げる、即ち去勢するのであり、「男性」としての「独立」欲求がそうした意味での去勢不安を生むのである。

(この項つづく)

〔付記〕 カミュの文学作品からの引用箇所の訳出に当っては、『カミュ I』、高島正明他訳、新潮世界文学 48 の訳文をほぼ踏襲し、『手帳 1』については、『太陽の讃歌』、高島正明訳、新潮文庫の訳文を参照し活用した。

なお、前節 B.項の(2)以下については、十分なる用意があるが、しかし(1)によっても躁鬱病に関する拙論の立場は既に十分明らかにしたと考えるし、又この項が余りに肥大することによって本稿の全貌が見失われることを恐れて、その発表は後日を期すこととし、先に第 4 節以下を発表することとした。

〔注〕

- 1) Albert Camus: *Carnets I*, Gallimard, 1962, p. 129. (以下、『手帳 1』と略記。) / 2) *Ibid.*, p. 215. / 3) H. R. Lottman: *Albert Camus, du Seuil*, 1978, p. 108. / 4) 『手帳 1』, p. 15. / 5) コストも「この最終行はおそらくフロイトから来ている」と判断している (Alain Costes: *Albert Camus et la parole manquante, étude psychanalytique*, Payot, 1973, p. 36.)。なお、コストに先立って、P.

ヴィアラネーは、カミュが1933年には既に「フロイトを読んでいたか」と自問し、それに肯定的な姿勢を示していた (P. Viallanex: *Le premier Camus*, in *Cahiers Albert Camus* 2, Gallimard, 1973, p. 48.)。又、A. J. アーノルドは「カミュがフロイト理論にある程度親しんでいたろうと推定されるに足る理由がある。そして、ある程度彼自身がこの理論を活用したということもありえないことではない」と述べ、この「推定」を裏付ける「理由」として、ヴィアラネーの推測と、拙論が本文で指摘した、アルジェの労働者学級でカミュがフロイト思想について講義した事実を、やはりロットマンのカミュ伝に拠って挙げている (A. James Arnold: *La poétique du premier Caligula*, in *Cahiers Albert Camus* 4, Gallimard, 1984, pp. 135-136.)。いずれにしても、推測の域を出てはいないわけである。フロイト思想とカミュの文学作品との関わりは、一考に値するテーマとして残されている。／ 6) Albert Camus: *L'envers et l'endroit*, Charlot, 1937. réédité en 1958 par Gallimard. / 7) Jean Gassin: *L'univers symbolique d'Albert Camus, essai d'interprétation psychanalytique*, Minard, 1981, p. 205. / 8) *Ibid.*, p. 215. / 9) Bernard Pingaud: *L'Etranger de Camus*, Hachette, 1971, p. 72. なお訳出に当って既訳 (パンゴー『カミュの「異邦人」』, 花輪光訳, 審美社) を参照し, 活用した。 / 10) *Ibid.*, p. 77. / 11) Albert Camus, *Essais*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1965, p. 1925. (以下, 『エッセー』と略記。) / 12) Gassin: *op. cit.*, p. 215. / 13) Pingaud: *op. cit.*, p. 77. / 14) *Ibid.*, p. 78. / 15) *Ibid.*, pp. 77-78. / 16) フロイト『性欲論三篇』, 懸田克躬・吉村博次訳, フロイト著作集第5巻収録, 人文書院, p. 82. / 17) Pingaud: *op. cit.*, p. 72. / 18) フロイト『女性の性愛について』, 懸田克躬・吉村博次訳, フロイト著作集第5巻収録, 人文書院, p. 149. / 19) フロイト『性欲論三篇』, p. 83. / 20) Pingaud: *op. cit.*, p. 74. / 21) *Ibid.*, pp. 74-75. / 22)-23) *Ibid.*, p. 76. 但し, 「共同の永生」はカミュ自身の言葉である (『エッセー』, p. 1215.) / 24) フロイト『文化への不満』, 浜川祥枝訳, フロイト著作集第3巻収録, 人文書院, p. 471. なお引用に当っては仏訳 (Sigmund Freud: *Malaise dans la civilisation*, P.U.F., 1971, p. 67.) を参照して若干の変更を加えた。 / 25) フロイト『精神分析入門 (下)』, 高橋義孝・下坂幸三訳, 新潮文庫, pp. 363-364. 但し仏訳 (Sigmund Freud: *Nouvelles conférences sur la psychanalyse*, Gallimard, 1936, p. 175.) を参照して若干の変更を加えてある。 / 26) Pingaud: *op. cit.*, p. 72. / 27) フロイト『性欲論三篇』, p. 82. / 28)-29) Pingaud: *op. cit.*, p. 77. / 30) フロイト, 前掲書, p. 79. / 31) 同書, p. 81. / 32) Gassin, *op. cit.*, p. 225. / 33) フロイト, 前掲書, p. 79. / 34) Pingaud: *op. cit.*, p. 76. / 35) Lottman: *op. cit.*, p. 35. / 36) フロイト『ある幼児期神経症の病歴より』, 小此木啓吾訳, フロイト著作集第9巻収録, 人文書院, p. 422. / 37) Gassin: *op. cit.*, p. 225. / 38)

フロイト, 前掲書, p.423. / 39) Gassin: *op. cit.*, p.169. / 40) *Ibid.*, p.144. / 41) D. W. ウイニコット『情緒発達の精神分析理論』, 牛島定信訳, 岩崎学術出版社, pp.49-51. / 42) H. スィーガル『メラニー・クライン入門』, 岩崎徹也訳, 岩崎学術出版社, p.101. 又 pp.126-127. も参照. / 43) 同書, p.95. / 44) フロイト『集団心理学と自我の分析』, 小此木啓吾訳, フロイト著作集第6巻収録, 人文書院, p.222. / 45) フロイト『精神分析入門』, 懸田克躬訳, 世界の名著49, 中央公論社, p.408. / 46) フロイト『ドストエフスキーと父親殺し』, 高橋義孝訳, フロイト著作集第3巻, 人文書院, pp.418-419. / 47) フロイト『トーテムとタブー』, 西田越郎訳, フロイト著作集第3巻収録, 人文書院, p.255. / 48) ウイニコット, 前掲書, p.100. / 49) 服部百合子『性差——相互存在としての男と女』, ユック舎, p.177. / 50) 同書, p.175. / 51) 同書, p.178. / 52) 同書, p.183. なお, 「早期三角形」に注目する E. Abelin は, 乳幼児期の父子関係について, 「微笑反応なので始まる父との関係は, 母親や同胞に対するのに比べやや遅れるが, 母親に対してと同じ共生期に始まり分化期〔生後五カ月から九カ月〕には父親への愛着を増し, 練習期〔九カ月から一四カ月〕には父親に特別の愛着を向けるようになる。父親は幼児にとって興味ある対象となり, 拡大されていく探索行動の魅力ある対象でもある。(……) 男の子は見知らぬ男性により早期に探索的に接近する傾向がある。(……) 練習期の終り頃から再接近期〔一年から二年〕には, 母親との関係は両価性に満ちたものになっていくが, 父親との関係は, 母親とのアンビヴァレンスを解決するのに必要な愛情対象であり続ける」(〔 〕内は鈴木補足)と述べているとのことである(滝口俊子『父子関係のなりたち』, 馬場謙一他編『父親の深層』, 有斐閣, pp.55-56.)。 / 53) フロイト『精神分析入門(下)』, p.358. / 54) ウイニコット, 前掲書, p.54. / 55) 同書, p.177. なお, 妥当な訳語と思われる「ほほ良い母親」については, H. ガントリップ『対象関係論の展開』, 小此木啓吾・柏瀬宏隆訳, 誠信書房, p.256. 参照. / 56) フロイト『ドストエフスキーと父親殺し』, p.419. / 57) フロイト『精神分析入門』, p.413. / 58) フロイト『精神分析入門(下)』, p.306. / 59) フロイト『精神分析学概説』, 小此木啓吾訳, 改訂版フロイド選集第15巻収録, 日本教文社, p.322. / 60) フロイト『精神分析入門(下)』, p.305. / 61) 同書, p.306. / 62) 同書, p.305. / 63) ウイニコット, 前掲書, p.51. / 64) フロイト『精神分析入門(下)』, p.307. / 65) 服部, 前掲書, pp.184-185.